2025 年度 総合型選抜 ＡＯ入試＜第２次選抜＞小論文【看護学部】

受　験　番　号	氏　　名
－	

次の文章を読んで、「患者にとっての最善」とはどのようなことかをふまえ、あなたが看護師であったらどのようにかかわろうと思うか、あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

いのちの終わりの一日、一週間、一ヵ月、一年をそれぞれどのように過ごすかを考えたことがありますか？
人のいのちははかなく、弱いものです。すべての人は老いと死を、そしてほとんどの人は病気を体験します。この 10 年間、高齢化の進行に伴い、「終活」「エンディングノート」などの言葉をよく耳にするようになり、人生の最期をどのように過ごすかについて注目が集まってきています。個人情報保護法や税制の変化などにより、どこでどのように生活するか、資産や持ち物をどのように整理するかなどについては、さまざまな情報が入手可能になっています。

さて、それではいのちの終わりの一日、一週間、一ヵ月、一年に、どこでどのような医療・ケアを受けたいかについてはどうでしょうか？ご家族やご友人があなたの代わりに気持ちを代弁することができるでしょうか？

多くの人は、「家族のいいようにしてもらったらよいから」などとおっしゃいますが、逆に家族の立場になってみたら、「(愛する人のために）できることは何でもしてあげたい」という気持ちになりませんか？この「できることは何でもしてほしい」を医師が家族の口から聞くと、多くの場合「医学的に可能なことはできるかぎりする」方針を家族が希望していると受け取られます。その方針が、患者にとって一番よいだろうと推定されることと合致するときは問題ないのですが、しばしば「患者にとっての最善」と「医学的な最善」は食い違うことがあります。そうなると、「患者にとってはしてほしくない医療」が行われてしまう、そして始めたものは止めることができない、というような状況になることがあるわけです。

では、どうしたら、人生の最終段階（ここではいのちの終わりの一日、一週間、一ヵ月、一年のことを、そう呼ぶことにします）において、自分が望む医療・ケアを受けることができるのでしょうか？

出典：長江弘子『自分の人生を、自分らしく「生きる」を考える』日本看護協会出版会，2017 年発行
（一部抜粋）